

東アジアにおける漢字の使用と文化的アイデンティティ

- 漢字復活の意味を問う -

The usage of Chinese characters and cultural identity in East Asia area.

- Question about the meaning of Chinese character revival -

宗近 水穂

Mizuho Munechika

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：漢字，東アジア，文化的アイデンティティ

Key words : Chinese characters, East Asian cultural area, Cultural identity

1. 研究目的

本研究では、東アジア諸国における「漢字」という共通点が、これからのグローバル社会においてどのような価値があるのか、漢字とその文化圏の未来について検討することを目的とする。

まず、東アジアには「漢字」を共通としたアイデンティティがあると考えられる。それは漢字を媒体とした東アジアの文化圏が中国で発生したこと、また漢字が第二次世界大戦前後まで東アジアでの国際文字であったことからいえる。しかし今現在、日常的に漢字を使用しているのは中国と日本だけである。また中国においては漢字の簡略化が進み、日本でも第二次世界大戦以降には漢字制限などが行われ、かつてほど漢字を重要視しなくなっている。その他の漢字文化圏の国とされるベトナムではアルファベット、韓国ではハングルと呼ばれる独自の人工文字が主に使用されているのが現状であり、漢字文化圏は外見上なくなっているともいえる。

グローバル化が進む社会の中で、改めて東アジアの文化としての枠組みや繋がりを考えることは、自国を見つめ直し、これからの自国のあり方、隣国との関係について考えるために必要だと考えられる。その中で、漢字を一つの文化問題として取り上げることは、文化交流の根本に視点をおき、東アジア諸国間のコミュニケーション方法を見直すことにもなり得る。漢字の使用が東アジアの国際文字としての価値を回復させ、諸国間における対話の機会を増やすことが期待される。

2. 研究実施内容

今年度は研究関連の文献・資料の整理を主に行い、研究主題を明確にすることを目標とした。具体的には、日本の明治時代以降に出現した漢字・漢語についての知識を深めた。

日本語には和語と漢語がある。和語は日本語を由来とした言葉だけでなく、漢詩や漢文との衝突によって漢語の翻訳語に固定された地方語、文語として登録された言葉を指す。古来の倭語もあれば、新たに作られた和語もある。漢語は中国からきた漢字とともにある言葉で、この両者で日本語はできている。

例えば、「春夏秋冬」は「シュンカシュウトウ」とも「はる、なつ、あき、ふゆ」とも読むことができる。これは和語性が強く、日本人の日常生活と共にある言葉で、和語が漢語に引き寄せられたと考えられる。「愛」「信」「礼」「死」「生」のような抽象表現は漢語性が強い言葉が受け持っている。この場合は漢語に合わせて訓読み語をつくり、当てはめていったと考えられている。

江戸時代末期から明治時代にかけて、多数の啓蒙家が西洋の思想や学術を日本に紹介するための新漢語を考案した。なかでも西周(1829~1897)と福沢諭吉(1835~1901)は、西洋の学術用語を体系的に翻訳したといわれている。

漢語の由来は、①中国からの借用、②中国古典語からの転用、③日本における造語の3種類に大きく分けられる。まず①は明治時代以前から中国で用いられていた漢語で、漢訳洋書や英華字典などを通して日本語で用いられるようになったもの

である。幕末・明治初期の知識人は、英語よりも中国語で翻訳された漢文を読み理解することで、西洋の知識を学び、その新しい概念を表す漢語をそのまま日本語に取り込むこともあった。

②は新たに造語するのではなく、中国古典に使われていた旧来の漢語を転用して、新しい概念に当てはめたものである。例えば、「自由」という漢語は、中国の古典漢文では「自分勝手にする」という悪い意味で使われることが多かった。そもそも過去の東洋社会に、西洋的な意味での「自由」という発想はなかった。これに対し西洋語の「freedom」や「liberty」は基本的人権と結びついた言葉であった。「liberty」に「自由」というぎこちない訳語を一般に普及させたのは福沢諭吉であったが、福沢自身も「自由」という訳語に違和感があったという。「自由」は明治の民権運動や、大正デモクラシー、太平洋戦争などを経て、およそ1世紀の歳月をかけて、自然な日本語として定着し、中国本土や朝鮮半島にも輸出された。

③は日本独自に漢字を当てて組み合わせた純粹の和製漢語である。日本語では漢字の組み合わせによって漢語を構成するため、英語からの直訳や、意識、音訳などによって多様な漢語が造語された。

漢字・漢語は和語に比べて抽象的な意味を表すものが多く、造語能力でも勝っていたことから、一般には漢語が訳語として用いられていた。幕末

以降の近代化の過程で学問や技術が急速に発展したのも、新しい概念に対応する訳語を短期間に造り、簡潔かつ明解な漢語を駆使できたことが大きな要因であるともいえ、漢語の果たした役割は極めて重要である。

3. まとめと今後の課題

日本語の語彙は江戸時代末期から明治時代にかけて大幅な更新が行われた。例えば、中国の古典に用例が見られるが、日本の近代においては同じ語形であっても意味用法にずれが生じている語。また西洋文化との接触により新たに作り出された西洋語の訳語などである。

今後は、『米欧回覧実記』(1878/明治11年)と『明六雑誌』(1874~1875/明治7~8年)の資料から、明治初期の漢字・漢語を抽出し、現在の漢字・漢語との意味・用法の比較検討を行うことを課題とし、来年度の修士論文への考察につなげていきたい。

4. この助成による発表論文等

①学会発表

[1] 宗近水穂「日本語の近代的転換と漢字使用 - 『米欧回覧実記』と『明六雑誌』における漢字・漢語を例に - 」, 第51回語彙・辞書研究会(三省堂), 2017年6月10日(土), 新宿NSビル3F(新宿区西新宿2-4-1)(発表確定)